

神の招きによって

今日、わたしたちに与えられている聖書箇所を、さきほど司会者が読むのを聴いて、みなさんの意識はどこに向いていたでしょうか。「意識」というのは少し言い方がおかしいかもしれませんが、司会者が御言葉を朗読しているとき、皆さんは聖書を開いて自分の目で追っていたでしょうか。目と耳で、御言葉を自分の内に取り込む。それがわたしの心に届くように、心の畑に御言葉の種が植えつけられるように全身全霊を傾ける。パンを食べるように、神の言葉を食べる。そういう言い方をしている箇所もありますね。旧約聖書で神はたびたび次のように人間に語りかけます。「聞け、イスラエルよ、あなたがたの神、主は～」、そう語りだされる。「シェマ・イスラエル」とヘブライ語で呼ばれる定型文です。「見よ、～」という表現もありますが、神さまご自身を、わたしたちの目という感覚器官で捉えることは出来ません。神は霊であるからです。「百聞は一見にしかず」ということわざは有名ですが、こと信仰に関するかぎり、あてはまりません。聞くことが絶対に先なのです。それ以外にはありません。アブラハム、アブラハム、モーセよ、モーセ。サムエル、サムエル、おめでとう恵まれた方、神があなたと共におられる、など。神さまの側からの語りかけが必ず先にあります。それを神の選びと言い換えてもよい。いまこうして神の言葉があなたに語りかけられていることが始まりです。そのとき、うつむいて聖書に目を落とし、文字を追っていてよいでしょうか。よい機会ですから、すこし読むことと聴くことの違いを考えてみたいと思います。わたしは子どもの頃から本が好きでしたので読むスピードは早い方だと思います。とくに小説のたぐいなど

は斜め読みという言葉があるように、もう習慣化した読書の癖であらすじだけを追ってゆくような読み方が身についています。文字面を目が撫でて必要な情報だけを拾ってゆくような読み方、ただこれは聖書には絶対に出来ない、やっても意味のあまりない読み方ですが、なかなか気づけない。聖書には神の言葉が記されていますが、それは紙に印刷された文字に過ぎません。しかし、神の霊の助けによって、それがわたしたちを捉えることがある。そしてそれはほぼ例外なく御言葉を読むのではなく、聴いた時、聖書の朗読や、その説き明かしである説教を耳にした時ではないかと思うのです。御言葉は、神の語りかける声そのものです。読むのはわたしです。しかし聴くときは、わたしに語りかける相手がおられるのです。一人称の行為としての「読む」という、閉じた、いつでも自分の都合で本を閉じてしまえる状況ではなく、目の前に神の言葉を取り次ぐものがいて、その声を通して御言葉がわたしに届けられる。このあなたが御言葉を発し、わたしがそれを受け取るという二人称の行為が大切なのです。ですから、お気づきの方もおられると思いますが、わたしは司会者が聖書を朗読するときに聖書を開くことをしません。目から入る情報を遮断するために大体目を閉じて朗読を聴いています。そしてこれも本当に面白いのですが、聴いていて「しまった」と思うことがあるのです。自分の目では素通りしていたような箇所が人の声で朗読されたとき、新たな意味をもって飛び込んでくることもあり、語ろうと準備していた説教原稿を手放すこともあるのです。だからいちばんよいのは半田教会では月間予定表が出されていますから、事前に今日語られる御言葉を読んで備えておく。自宅で一週間かけて、来週の御言葉をつねに頭の片隅において生きてゆく。これは牧師が説教

準備のためにしていることですが、心のなかで転がしておく。そして時間がなかったならば礼拝が始まる前に、よく今日の説教箇所を読まれることです。この礼拝式全体が御言葉を中心に組み立てられています。讚美歌は御言葉への応答ですし、交読詩編もそうです。すべては、この日、わたしたちに語られる神の言葉を中心に組み立てられる。そしてそれらに命を吹き入れられ、出来事とされる神の霊の導きを祈りつつ、わたしたちは共に聴くのです。こうした基本を確認した上で、今朝、ペテロが、教会に集う群れに語りかける神の言葉はこれです。

「身を慎んで目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食いつくそうと探し回っています。信仰にしっかり踏みとどまって悪魔に抵抗しなさい」、このように勧めるのです。さて、これはいまのわたしにはあまり関係ないと思われるでしょうか。しかし、たとえば今日この聖書箇所がウクライナの教会の講壇から語られているならどうでしょうか。このように御言葉は時と場所によって、つまりわたしたちの置かれている状況によって、受け手の境遇によって受け取られ方が違います。そしてこの群れの中にきっと今朝、この御言葉を必要としている方がおられる。そしてその方の証を通して、わたしたちは神が今も生きて働いておられることを聴くときがくるでしょう。礼拝を人生の避難訓練といった人もいます。試練のない人生はありません。悪魔のような試練、火のような迫害、無理解や誤解、そうした日々を備えて、今日、わたしたちは共に御言葉に聴くのです。さて、このペテロの取り次ぐ言葉は命令でしょうか。「目を覚ましていなさい」「抵抗しなさい」、そう頭ごなしに、高いところから、このようにするのだと聞こえるで

しょうか。どうでしょうか。わたしは聖書に出てくるこのたぐいの言葉、「～しなさい」という言葉はすべて「命令」ではなく、「招き」と読み替えます。それらはすべて神がわたしに命を得させるために与えられた言葉であり、調和と一致を保って歩むことの出来る平和の道であるからです。礼拝の始まりが「招きの言葉」から始められるように、救いへと招待されている。救い主であるキリストの整えて下さる食卓に招かれてくるのがわたしたちなのです。招いてくださるから出席できる。与えてくださるから分かち合える。無い袖を振れというのではありません。神の命令には必ず祝福の約束がともなう。わたしがあなたと共にいるという約束がある。イスラエルとは「神が支配される」「神が戦われる」という意味です。あなたは決してひとりではない。神が与えて下さる信仰にとどまれと言われているのです。信仰を作り出せとは言われていない。ここはとても大切なところ。信仰に留まって悪魔に抵抗しなさい、というのは、譬えとして適当か少し迷いますが、塹壕に留まって戦えということです。戦場にすでに拠点となる塹壕が築かれている。わたしたちのためのシェルターが、逃げ場がすでに備えられているということです。それは十字架です。神の御子の受難、流された血によって清められた土台があるということです。ここに留まる。「十字架のもとぞいとやすけき、神の義と愛のあえるところ」と歌われる場所がわたしたちに差し出されている。備えられている。信仰に留まるとは観念的なお題目を言っているのではない。主義やイデオロギーといったもので戦えというのでもない。イエス・キリストの十字架の死はポンテオ・ピラトのもとで行われた歴史的な事実です。この神が、わたしのために独り子を十字架で公開処刑なさったという事実、「ナザレのイエス、

ユダヤ人の王」と掲げられた罪状書きによって、この方が王として、代表としてご自身の命を差し出されたこと、責任者として処刑されたことが分かる。神に対して、わたしたちの責められるところの背きの一切合切を、処理してくださった。もうわたしたちの良心において、咎められるところはない。いかに試練の時に悪魔がお前のような人間は救われることはない、と、わたしたちの心をえぐろうとも、ルターのようにインク壺を投げつけてやればよい。キリスト・イエスがわたしの贖い主であり、救い主であられる。この方がおられる、十字架が答えであり、苦難と死に怯えるわたしのための塹壕であり、三日目の復活が希望です。死が終わりではなくなっている。刑罰としての、わたしを責める死はもう消滅している。十字架の福音がそれを告げるのです。だからわたしたちがキリストに結ばれて受ける苦難はすべてこの救いの秘儀とつながって救いの道へと至らせます。わたし自身が不義を行って苦しむのではキリストの顔に泥を塗るだけです。救われた者がそのようであってはならないとペテロもこの手紙で述べていました。しかし、いまこの手紙を贈られて励まされている人々は信じたゆえに地上の故郷を失った。それによってキリストを信じるものであることを明らかにし、キリスト者であることを身に負った人々です。それを神に選ばれた人たちとペテロは呼びました。彼自身もそうだったからです。そして、悪魔はこのキリストを信じるものたちを率先して叩く。悪魔に屈しない人たち、神に守られた人たちだからです。ここで退くか、背を向けるか、しかしそれは救いに背を向け、希望を失うことだとペテロには分かっています。わたしたちの一番弱いところは何かを、彼はよく知っています。一人で戦うのではありません。目を覚ましていなさいとはキリスト

の語られたことに、主が教えられたことに目覚めていることを言います。待機状態でいることです。そして、神が与えてくださった信仰、十字架と復活の信仰に留まる。繰り返しますが、自分のうちによりどころを求めるではありません。それがいかに弱く、頼りないものであるか、苦難や、試練、自身の病や死の恐れにとりつかれた時、自分のなかに立とうとすることがいかに脆いものか、ペテロは知っていましたし、わたしたちも知らされることになります。だから、わたしのうちではなく、わたしの外へ、わたしたちは逃れる。キリストの十字架のもとに逃れます。そして、そこには神の民の群がいます。十字架の福音を掲げてこの世を歩む教会、御子はその血で贖いとってくださった尊い羊の群れが生きる場所があります。この場所でわたしたちは御言葉を語りかけられる。くびきのように、キリストの受難とつなげて人生を理解するように招かれる。今日、あなたに語りかけられる主の御言葉はこれです。招きであると同時に約束でもあります。あなたは試練にあうだろう。「しかし、あらゆる恵みの源である神、すなわちキリスト・イエスを通してあなたがたを永遠の栄光へと招いてくださった神ご自身が、しばらくの間、苦しんだあなたがたを完全な者とし、強め、力づけ、揺らぐことがないようにしてください。」

この御言葉に賭けて、試練と苦難に驚き慌てず、この2023年という激動の年を、主の約束を支えとしてともに進んで行きたく願っております。

お祈りいたします。